はこべら賞

川越の百円駄菓子梅雨晴れ間

金子まもる

千葉県八街市

石田波郷記念館賞

なでしこを足して母への見舞籠

尾﨑千代一

神奈川県平塚市

上田日差子選

特選

波郷忌やとんと見掛けぬ雀どち　　栃木県　平野　暢行

〈評〉波郷は五十句余り雀の句を詠んでいるという。「はこべらや焦土のいろの雀ども」もそのひとつ。「波郷忌」との取合せは妙。近年は生活環境の変化で雀の数が減ったそうだ。波郷と昭和への懐古の念が託されている。

川越の百円駄菓子梅雨晴れ間　　千葉県　金子　まもる

〈評〉「川越」に兼題「川」が詠みこまれている。約三十軒の菓子屋がひしめく菓子屋横丁は人気である。一歩入るとたちまち童心がよみがえる。「百円駄菓子」は実に嬉しい。「梅雨晴れ間」の至福のひととき。

なでしこを足して母への見舞籠　　神奈川県　尾﨑　千代一

〈評〉母親へのお見舞いに花籠を求めたのであろう。「なでしこ」は母の好きな花。母が庭に育てている花を切り、見舞籠に足したのかもしれない。石田あき子句集『見舞籠』へのオマージュも感じられる。

入　選

生かされて生きて天命波郷の忌　埼玉県　古郡　孝之

波郷忌の書斎の塵を払ひけり　神奈川県　竹澤　聡

波郷忌の近しと思ふ柿食へば　神奈川県　今関　十三里

熱燗は手酌が好み波郷の忌　中野区　このみ　ていこ

川舟の置かれしままや雪催　高知県　徳廣　由喜子

噴水の水落つるやう昇るやう　神奈川県　今関　十三里

ゴッホ展出でて色なき風の中　江東区　星野　将江

赤べこの首かたかたと雪催　千葉県　大久保　文夫

蜜豆や嫁がぬ人の恋ひとつ　神奈川県　加川　幸江

父と子の影ひとつなる良夜かな　京都府　吉井　紅

岸本尚毅選

特選

散るけはひなき川べりの冬紅葉　　岐阜県　七種　萩子

〈評〉川のそばの木の冬紅葉。川面に映りつつ、散る様子もなく、冬紅葉の盛りを保っていることがわかる。

涸れ川や日かげ日なたと石蕗咲いて　　神奈川県　神野志　季三江

〈評〉川が涸れ、乾いた感じの岸辺に石蕗が咲いている。何かの日陰があって、日向にも日陰にも石蕗がある。いい情景句だ。

寒夕焼砂町をバス定刻に　　品川区　本多　遊子

〈評〉寒夕焼の砂町。定刻にバスが発着する。そのささやかな安堵感。おだやかな日常を大切にする気持が伝わってくる。

入　選

ひよんの笛置けば別れの深大寺　兵庫県　高田　信行

小さき手や川つめたしとしか云えず　大分県　小手川　とし

またも十一月二十一日来　世田谷区　金子　秀夫

屋上に見おろす師走川暗く　神奈川県　神野志　季三江

白き咳夜に放ちて波郷の忌　千葉県　一言　遊子

遠足や農学校の牛を見に　千葉県　渡辺　多美子

橋からも堤防からも鯊の竿　千葉県　鹿兒嶋　俊之

襟巻のきつね四谷で降りにけり　埼玉県　人見　正

磁力あるやうに落葉の吹き溜まる　千葉県　物江　里人

まだ雫ふるえて木々の茂りかな　清瀬市　淵上　淳乎

鈴木しげを選

特選

小名木川に十五橋あり月今宵　　江東区　岡本　輝久

〈評〉小名木川は隅田川から旧中川まで東西を横断する川。芭蕉庵跡とされる萬年橋から中川の番所橋まで橋が十五あるという。この直線の一筋の川を中秋の名月が照し出している。澄明な一句である。

かね仙も更地となりぬ波郷の忌　　江東区　津久井　英喜

〈評〉戦後半年ほどを経て波郷は江東区北砂に転居した。かね仙の屋号で建材を商う妻あき子の実家である。戦後八十年このかね仙も更地となった。波郷の足跡が一つ消えた思いである。

丹の椀にあづかる粥や初大師　　岐阜県　富田　澄江

〈評〉初大師は一月二十一日。その年はじめの弘法大師の縁日である。厄除の粥を炊いて信者に施すこともあるのだろう。ありがたく弘法の御利益に与るのである。

入　選

あたたかや波郷の赤鉛筆のメモ　大阪府　今井　文雄

川越の百円駄菓子梅雨晴れ間　千葉県　金子　まもる

みんみんの止めば川音戻りけり　目黒区　齋藤　敏

柿をもぐ子規も波郷も柿好きと　世田谷区　関戸　信治

ためらはず己を生きて夏椿　埼玉県　栗原　ひわた

辻馬車の蹄の音や秋日和　福岡県　則松　長子

朝月や七日七夜の志野の窯　岐阜県　安田　一義

片蔭をゆきて片かげゆづりけり　岐阜県　川島　靖子

晩菊や母の手を知る花鋏　神奈川県　坂口　和代

世に疎く生くるも善かれ花八つ手　佐賀県　富永　喜美枝

徳田千鶴子選

特選

母が名を記す流燈置く川面　愛知県　海神　瑠珂

〈評〉盂蘭盆の供養で、私も灯籠を流した経験があります。川から海へ漂いながら流れていく姿に思い出が重なりました。

綿虫の還りゆく空惜命忌　千葉県　物江　里人

〈評〉まるで沸くように表われ、纏いつく綿虫は、人懐こいが儚い虫です。〈綿虫やそこは屍の出でゆく門〉中七の〈還りゆく空〉に波郷への思いがあります。

花筏ひかりかさねて堰を落つ　神奈川県　冨沢　昌晴

〈評〉散った桜の花びらが、川面を流れていく景色は、美しさと共に儚さもあります。過ぎゆく春への思いは、中七の〈ひかりかさねて〉に溢れていると思いました。

入選

たそがれの川に影絵となるすき　兵庫県　前畠　一博

川底に終のきらめき鮭のぼる　石川県　西郡　うり

糸とんぼ川の光りに見失ふ　千葉県　河村　凌子

川舟の影を正すや後の月　神奈川県　堀田　ひでと

山影を深く沈めて鮎の川　岐阜県　安田　一義

なでしこを足して母への見舞籠　神奈川県　尾﨑　千代一

古里の空を撓めて柿を捥ぐ　神奈川県　清水　善和

晩菊や母の手を知る花鋏　神奈川県　坂口　和代

世に疎く生くるも善かれ花八つ手　佐賀県　富永　喜美枝

帰り花小さく漏らす一人言　府中市　上岡　沙羅

能村研三選

特選

折鶴の息へ息足す惜命忌　　練馬区　曽根　新五郎

〈評〉折り終えた折鶴の下部に息を吹き込めば、胴体が膨らむが、単に息を吹き込むだけでなく、自分の生命力や心、願いをその折鶴に宿らせた。命を惜しむ気持ち、つまり生きたいという強い願いである「惜命」という言葉が折鶴と結びつくことで、より一層、命への切実な思いが強調された。

惜命と全うせむと鳴く蟬と　　鳥取県　角田　文洋

〈評〉「惜命」は波郷が、結核という病の中で生を見つめ、命の尊さを深く感じたからこそ生まれた言葉だが、蟬の鳴き声には、短い一生を精一杯生きる姿と、私たち人間に問いかけるような深いメッセージがある。夏の盛り、力強く響き渡る蟬の声は、まさに「生の謳歌」で、短い命だからこそ、その一瞬一瞬を輝かせようとする強い意志が感じられる。

トレモロを聴くよに老いを気づく秋　　江東区　吉田　天

〈評〉トレモロは、楽器演奏において、同じ音または二つ以上の音を素早く反復・連打する奏法だが、そのトレモロのような老いの足音が秋の深まりとともに感じられた。秋になると過ぎ去る季節に自身の変化を重ね合わせたのだろう。

入　選

波郷忌や人うらやまず世にこびず　練馬区　小林　文隆

生かされて生きて天命波郷の忌　埼玉県　古郡　孝之

詠む言葉紡ぐ言の葉波郷の忌　江東区　松野　秀雄

太陽は地球の指針川開　岡山県　世界　平和

おのおのがおのおの冬の灯へ帰る　新潟県　田代　草猫

鶏頭の握り拳の闘志かな　福岡県　則松　長子

どう咲く桜わたし無色の老婆でいい　埼玉県　成田　清子

秋澄むや一筆箋のやうな雲　世田谷区　吉野　新一

磁力あるやうに落葉の吹き溜まる　千葉県　物江　里人

初凧の鬼面目をむく能登焦土　福岡県　矢野　信正

新人賞

通りすがり

辻村栗栖（東京都・20歳）

剪定やおほきな道を手分けして
春もなほ蜜柑送つてくれにけり
ゆかりなき港が親し蝶の昼
寄居虫や灯台の絵を売り暮らす
花簪眼の底へ夜が沁み
泉へは一本道と思ひしが
紫陽花濃し写経の後のまなざしに
厩舎にもすこし入りたる夏霞

昼顔やさはつて選ぶ門の鍵

レモン水通りすがりの浜へ降り

虫売や夜風にこゑをさりげなく

山へ行く話の進む新酒かな

林檎園悩まずに吹く風ばかり

一艘が木犀の香を離れけり

ひとつづつ傘の着きたる夜寒かな

茶の花や寮生が掃く寮のまへ

東京に降る初雪のおほがかり

火消壺摘みし蝿を擦り入れ

ポプラの木縄跳の子が休みに来

小名木川夜景のなかを細く冴え

準賞

されずゐる

篠原　圭太　（愛知県・22歳）

囀りや花瓶を仕舞ふ皿の棚
花薊足の痺れは泡に似て
鉄骨の担がれてゆく黄砂かな
蝶の昼この道に出るとは知らず
山ざくら欠伸の涙あたたかし
我が物と思しきソーダ運ばれ来
車から降ろす自転車新樹光
蛍舟けふと思へぬ昼のこと
二人してキャンプの子らの濡れてきし
戻らうか次噴水が上がつたら
かなかなや錠剤尽きて瓶に粉
鉛筆を久しく持たず草の花
断捨離に虫籠のまへを行き交へる
裏紙のおもて数式火の恋し
知恵の輪のふと外れたる暮秋かな
湯ざめして顔認証がされずゐる
神留守の束子の乾ききつてをり
磨硝子越しにもクリスマスツリー
重詰の栗きんとんに箸の痕
絵双六敷けば折目の浮いてをる

準賞

会ふ顔

堀内晴斗（愛知県・20歳）

振りながら歌留多の箱を持つてくる
さへづりや犬が飲みたる水の濁
学ぶことたのしくなりし春帽子
閲すればこき人と知る日永かな
和菓子屋の黒き柱も四月なり
教室に従弟がひとりヒヤシンス
きのふけふ立ち読みに来る梅雨の地下
考へを立ち他人のクリームソーダ見て
腕立てに畳のにほふ暑さかな
木の棒が氷菓の中に透けてゐる
冷房のなか黙々と譜を覚え
別卓へ話しにゆきぬ秋扇
悉く予定の合はぬ糸瓜かな
朝寒や床に落として宿の下駄
をちこちに旧字の遺る茸山
冬に入る殺虫剤の蜘蛛の絵も
待つ顔が会ふ顔になる聖樹の前
ダンボール炭と大きく書いてある
ちらと見ゆ校長室の赤絨毯
春待つや花の図鑑に虫写る

大山雅由記念奨励賞

展翅の蝶

伊藤　菖蒲　（東京都・23歳）

海猫渡る　ジグソーパズルに巴里の市
居残りの　ミシン絡まる遅日かな
水だけの　花瓶卒業歌の二番
菜の花や　海抜百メートルの標
わたあめ　にひかりの繊維聖五月
吾の影の　心臓を這ふなめくぢり
まどろみ　の夏野にまぼろしの大樹
図書館の　みな禁書めく白夜かな
グラジオ　ラス銀貨は古き街を知る
シャワー　シャワーすべて忘れてしまいませう
八月の火　にマシュマロを溺れさせ
秋めくや　墨絵に白き昼のある
龍田姫馬　は愉快な名で競ふ
虚栗寄り　添ひ合つて崖の上
微かなる　迷子の記憶カンナ燃ゆ
月光は幾　重の針や展翅の蝶
沈み切ら　ぬほどに黒鍵押して冬
鐘冴ゆる　湖畔に波のやうな砂
針金の鳥　が見てゐる冬の水
撫でられ　し跡を残して雪うさぎ

相子智恵

秀逸10句選

火の中にぼんやりとある飾かな　福田 匠翔（18歳）「川の名」

恋終はる氷柱のなかを日は遅れ　塩崎 帆高（24歳）「鱚」

大干潟わが足跡のたくましく　宇都宮 駿介（21歳）「螺子の溝」

獅子舞のあぎと一気に下がりけり　小鳥遊 五月（23歳）「ほしいまま」

涼しさや電話切られし後に切る　池田 宏陸（27歳）「岸と沖」

ミモザ買ふ海へなだれるやうに町　新堀 笙子（19歳）「忘れてゆく」

子の数の卵を割りぬみどりの日　三輪 修平（16歳）「湯気」

五月病泥にライター埋まりかけ　幸村 遥都（20歳）「籐椅子」

草の花ことばひとつに一日倦み　冨嶋 大晃（20歳）「暗算」

ぼこぼこのバケツ穴子の首満ちぬ　谷村 行海（30歳）「穴子の首」

西村麒麟

秀逸10句選

稲妻や見ゆる限りが青信号　新堀 笙子　（19歳）「忘れてゆく」

入れる間も蛍出てきて蛍籠　清水 久磨瑠　（19歳）「REBORN」

にんまりと木魚の口や桜まじ　遠藤 史都　（29歳）「にんまり」

キス一瞬また飛び立つて親燕　橘 花優　（26歳）「キス一瞬」

蓑虫にびしよびしよの心臓あらむ　原島 奏　（16歳）「探し回る」

冬の蠅飛ぶより速く登りけり　汐野 三書　（23歳）「クレヨン」

天高し手本のやうに犬の鳴き　宇都宮 駿介　（21歳）「螺子の溝」

火の中にぼんやりとある飾かな　福田 匠翔　（18歳）「川の名」

父の忌も母の忌もゐし捨案山子　高﨑 椿　（21歳）「故郷の月」

冬の星ナイフ洗へば水傷つく　池田 宏陸　（27歳）「岸と沖」

藤井あかり　秀逸10句選

火の中にぼんやりとある飾かな　福田匠翔（18歳）「川の名」

劇場に泊まる劇団春の雪　東野礼豊（17歳）「画廊」

昼寝より覚め沖縄と呟きぬ　谷村行海（30歳）「穴子の首」

新聞紙昏し残暑の人待ちに　冨嶋大晃（20歳）「暗算」

大風や芭蕉の裏に子供ゐる　藤井万里（22歳）「跣足」

指狐跳ねて無月の草のなか　百瀬一兎（28歳）「棒を離れて」

歯磨きの舌のせはしく雁渡る　斎建大（19歳）「此岸にて」

高い車安い車がしぐれけり　原島奏（16歳）「探し回る」

冬怒濤描くにどうも赤が要る　遠藤史都（29歳）「にんまり」

墨さらに内なる闇を寒燈下　横山航路（22歳）「無名」